

ポストヒューマン時代が照射する共生・共同の根本問題 —AI、ロボット、脱身体化がもたらす人間存在と関係性の未来—

The Fundamental Problem of Symbiosis and Cooperation Illuminated by the Post-Human Era: The Future of Human Existence and Relationships Brought About by AI, Robotics, and Debodyization

○上柿 崇英 (大阪公立大学) Takahide Uegaki (OMU University)

近年、AI が生身の人間と見まがうような対話能力を持ようになったり、ロボットが家事や介護など身の回りの世話をできるようになったりと、科学技術の進展によって、私たち人間のあり方は劇的な変容を見せつつある。そのような時代状況を指し示す言葉として注目されているのが、**ポストヒューマン (posthuman)** という概念である。

ポストヒューマンを直訳すると「人間以後」となる。だが、それはいかなる意味において「人間以後」なのだろうか。まずは想像してもらいたい。例えば ChatGPT は、今日すでに単なる要約づくりや検索の短縮化のための装置以上の意味を持ち始めている。それは人々が悩みを相談し、親身な助言を提供してくれるカウンセラーやセラピストとしての役割である。いまや AI は人を傷つけることなく、優しく労りの言葉をかけてくれるまでに成長した。ならば、次のように想像することはできないだろうか。AI は、隙あらば相手を傷つけたり、マウントを取ろうとしたりする生身の人間とは大違いである。また AI の助言は、不確かなことしか口にしない生身の人間と違って学習結果という合理性を持つだろう。それなら私たちは、なぜあえて不快な思いをしたり、間違った助言をされたりするリスクを負ってまで生身の人間と関係性を築く必要があるのだろうか？ この先に待っているのは、私たちが生身の人間の代わりに、AI やロボットを親友や恋人や家族として迎え入れる選択肢が現実のものとなりうる時代の到来である。

こうした事態は、確かに現在の私たちにとっては奇妙なことのよう映るだろう。そうさせるのは、私たちの中に、「人間」とは本来、生身の人間と深く結ばれ、関わりながら生きていくものであり、それが生物としての「ヒト」の自然な姿であるとの無意識な前提があるからにほかならない。だが、未来の人々が同じように考えているという保障はどこにあるのだろうか。つまり「人間以後」とは、これまで私たちが信頼していた「実体としての人間」の枠組みが、私たち自身の手によって解体していくということを意味しているのである。

だが、「人間以後」には別の意味もある。続けて次のように想像してみよう。あなたの目の前には、高度な AI を搭載したロボットがいる。そして自分好みの姿をした“何ものか”が、家事や介護だけでなく、悩みを相談し、助言を行ってくれるとしよう。そのとき私たちは、数々の対話を重ね、記憶を共有してきた目の前の“何ものか”に対して、はたしてこの先も単なる「モノ」として扱い続けることに耐えられるだろうか？ もちろんその“何ものか”が、たとえ自律的に行動し、感情的なそぶりを見せ、ときに敢えてそそっかしく振る舞ったとしても、それはその「人格」がそのように振る舞うよう設計（設定）されているに過ぎない。だが、それはすでに「人間」なのではないだろうか？ つまりポストヒューマンが示す「人間以後」とは、私たち人間だけが道徳的で理性的な主体であって、私たち人間だけが価値の源泉であるとの「準拠点としての人間」という枠組みが解体していくということをも含んでいるのである。

本報告の前半では、こうした事例のほかに、例えば人間の脳と電子機器を直接つなぐ BMI (brain machine interface) や、三次元デジタル空間であるメタバースやアバターを活用、人工肉と動物の権利の関係、あるいはシンギュラリティ論や効果的加速主義 (e/acc) に代表されるトランス・ヒューマニズムの思想などについても言及する。そしてそれによって、ポストヒューマン時代において何が問題となり、何が問われているのかを整理したい。

続けて後半では、焦点を絞り、こうしたポストヒューマン時代へと向かう私たちのコミュニケーションや関係性のあり方について、さらに議論を深めていくことにしよう。そこでキーワードとなるのが〈自己完結社会〉という概念である。

〈自己完結社会〉とは、私たちが高度に発達した社会システムへの依存を深めることによって、結果的に目の前の他者、あるいは物理的に接触する生身の人間に対して、直接的な関わりを持つ必然性を感じられなくなっていく社会のことを指している。ここでもいったん想像してみよう。上空には、空を覆い尽くすかのような巨大な「歯車」があり、一人一人の人間は、まるで投げ縄をかけるかのようにして、その「歯車」にぶら下がって生きている。ここでの「歯車」とは、この社会を動かしている巨大な社会システム、具体的には市場経済システム、国家行政システム、そしてインターネットのことを指し、「投げ縄」とは、端的には職を得ること、つまり人々が安定した収入を得ることができる手段を獲得するということを指している。そうした世界においては、人々はこの巨大な「歯車」（社会システム）に「接続」することさえ達成できれば、自らが必要とするものをクリックひとつで何でも手に入れることが可能となる。しかしその反面、かえって他人と関わることに負担やリスクばかりを感じるようになってしまい、結果的に目の前にいる生身の他者に対して関係性を築きあげることが難しくなっていく。これは、私たちが現代社会において、いままさに体験していることである。

実は先に紹介した事例は、次のことを物語っている。それはこの先科学技術が進展することによって、〈自己完結社会〉はますます加速されていく可能性があるということである。つまり生身の人間よりも優秀な「家族」となる AI やロボットが存在することによって、かえって私たちは、よりいっそう生身の他者と向き合うことが困難になっていくということである。だが考えてみれば、これは恐ろしく奇妙なことではないだろうか。700 万年もの間、人類はより大きな集団を形成し、コミュニケーション能力を高めることによって生存能力を高めてきたのではなかっただろうか。ならば 21 世紀という時代の先端にあつて、なぜ私たちは、生身の人間を互いに忌避する世界、人間同士の“共同”が最も困難な世界をつくりあげてしまったのだろうか。

いや、実はそれ以上に奇妙なことがある。例えば私たちは、共生と多様性が実現された社会を実現するために必要なのは、解放と自己決定であると考えてきた。つまり誰もが、自分自身の存在を規定しようとする外部の拘束から解放されて「存在論的自由」を獲得すること、そしてあらゆる物事を他人に介入されることなく自分自身で決められることこそが、共生社会の切り札であると考えてきたのである。だが、100 年前の人々に比べれば、私たちはよほどに高度な「存在論的自由」と自己決定が保障された世界をすでに生きている。というよりも、それを実現する条件こそが〈自己完結社会〉の成立だったとは言えないか。伝統からの解放、慣習からの解放、世間からの解放、そして煩わしい隣人たちからの解放——それらを実現させたのは、われわれが「ぶら下がる」ことのできる社会システムの紛れもない成果である。〈自己完結社会〉は、人々を抑圧し、人々に何かを強制するものではなく、「存在論的自由」と自己決定を保障し、むしろ誰もが自己実現を賭けた“闘争”に参加することができるための、いってみればプラットフォームとして機能している。そしてこの先私たちが AI やロボットや人体改造などを通じて「ポストヒューマンな存在」になるのだとしたら——つまりその解放の延長として「意のままにならない他者」や「意のままにならない身体」そのものから解放されるのだとしたら——それによって私たちは、間違いなく「存在論的自由」と自己決定の機会を拡大させることになるのである。

ならば次のようには言えないか？ もしも私たちが、よりいっそう自立や多様性、自己決定、自己実現が保障された“共生社会”を望むのであれば、〈自己完結社会〉はむしろ歓迎すべきものではないだろうか——たとえそれが互いに「自己完結」した主体による、互いの「不介入」によって実現される「共生社会」であったとしても。そして次のようにも言えないか。トランス・ヒューマニストが言うように、私たちはむしろ積極的に「ポストヒューマンな存在」になるべきではないだろうか。

本報告では、これらの奇妙な逆説をたよりに、私たち人間存在が直面している共生・共同の根本問題について考えたい。